

県立図書館だより

平成25年2月

青森県立図書館報 第15号

新収蔵資料展「十人点描 -資料が語る作家のこころ-」開催

青森県近代文学館では1月19日(土)から3月20日(水)までの会期で、企画展示室(県立図書館2階)において、**新収蔵資料展「十人点描 -資料が語る作家のこころ-」**を開催しています。

近年新しく当館蔵となった資料の中から、これまで公開されていなかったものを中心に、本県ゆかりの作家10人の原稿・書簡・遺品等を展示しており、下に掲げたポスターには、肖像のほか、各作家の主要な展示資料の写真が1枚ずつ掲載されています。



生年順に紹介すると以下のとおりです。

- ① 葛西善蔵が北海道旅行の直前に妻の実家から編集者に書き送った葉書
- ② 福士幸次郎が荻原井泉水に宛てた2メートル近い手紙
- ③ 夏目漱石『門』をはじめ、鳴海完造旧蔵の初版本コレクション
- ④ 北村小松手製のレコードプレーヤー
- ⑤ 菊谷栄の脚本原稿の数々
- ⑥ 高木恭造の方言詩の英訳が掲載された雑誌・書籍
- ⑦ 今官一の未発表原稿「月下点」
- ⑧ 菊岡久利の墨彩画「だいこくさま」
- ⑨ 三浦哲郎の原稿「さすらいびと」(単行本未収録作品)
- ⑩ 長部日出雄の原稿「異邦人の眼と永遠の青春」

上記以外にも、各作家の人柄や持ち味、意外な一面を伝えてくれる魅力的な資料を多数展示しています。皆様の御来館をお待ちしています。

※展示の詳細は、「開催中の企画展」(<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/junin.html>)を御覧ください。

目 次

新収蔵資料展「十人点描 -資料が語る作家のこころ-」開催	1
ようこそ！児童閲覧室へ	2
こんなレファレンスがありました	3～4
子どもの本の紹介	5
郷土資料の紹介	6
近代文学館資料の紹介	7
カウンターから一言	8

ようこそ! 児童閲覧室へ

児童閲覧室では、子どもたちが本や図書館に親しめるように、おはなし会や科学おはなし会など、さまざまなイベントや展示を行っています。今回は、冬休みに行ったおはなし会と、児童室の展示、読書スペースをご紹介します。

【青森放送アナウンサーと高校生による冬休みおはなし会】

平成 25 年 1 月 9 日、10 日に、青森放送アナウンサーの上野由加里さん・栞子英里さんと、青森中央高等学校のみなさんによる、大型絵本などの読み聞かせをしました。

今回参加してくれた青森中央高等学校のみなさんは、保育を勉強している 3 年生の 4 人で、「緊張した」と言っていたものの、優しく語りかけるような読み聞かせに、聞いている子ども達は、おはなしの世界へぐんぐん引き込まれていました。

上野さん、栞子さん、そして青森中央高等学校のみなさん、ありがとうございました。



【展示コーナー】

昨年 12 月から、児童閲覧室奥に、青森県出身の児童図書作家を紹介する展示コーナーと読書スペースを新たに設けました。



展示コーナー



読書スペース



この展示コーナーでは、青森県出身の児童図書作家の作品やエピソードを紹介し、その作家について知ることのできる様々な資料を展示しています。

2 月は、三戸町出身の馬場のぼるさんを紹介しています。馬場さんの幼いときのエピソードや、上京するきっかけも紹介していますので、ぜひ、親子でご覧ください。

こ んな

レファレンスがありました (第15回)

～海浦義観僧正と謎の漂泊僧「空念」～



本を読んでいると、書かれている内容から別の作家や作品、思いもよらない事柄へ惹かれていくことがあります。「本が本を呼ぶ。」とでも言うのでしょうか、皆さんも、一冊読むたびに世界が広がっていくと感じたことがあるのではないのでしょうか。

民俗学者 柳田國男の『海南小記』（初出；『東京朝日新聞』大正10年、初版本；大岡山書店・大正14年、『柳田國男全集 3』筑摩書房 平成9年 所収）の四「ひじりの家」に、

「～ 曾て深浦沿革史を世に公にした海浦（うみうら）さんと云う人は、～あんな阿倍比羅夫の直系見たやうな、昔の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。～」

と、津軽で出会った人物を思い浮べるくだりがあります。

この『海南小記』は、柳田が九州から奄美・沖縄・先島を巡ったときの記録で、「ひじりの家」は、日向（現在の宮崎県）路、鎮守の稻荷様を訪ねたときのことで、柳田自身も「～是とは縁も無い遠い津軽の海岸の荒浜を思い浮かべた。」と書き始めています。

南方の島々の話のなかに、突然、北は津軽の、しかも阿倍比羅夫のような昔のままの山伏と表される人物が登場するのですから、いったい、どんな人であったのか興味を惹かれてしまいます。

今回のご質問は、この「海浦」氏に関するものでしたが、郷土青森に関係する思いもよらない事柄につながっていきます。

【質問】「海浦義観」はどんな人だったのか知りたい。資料・写真はありませんか。



左の写真は、「海浦僧正追想號」として発行された『修験研究』（第二巻第一號；通巻六號 修験研究社 大正11年）に掲載された海浦義観氏の肖像写真です。

『深浦町史 下巻』（深浦町役場 昭和60年）「第9章 人物」中にも、「六尺近い堂々たる姿体」という言葉からはじまる郷土の人「海浦義観」を紹介する記事（pp562-564）があり、同じ写真が掲載されています。

柳田が、「阿倍比羅夫のような昔のままの山伏」と表現した風貌は、堂々とした威厳を感じさせます。

海浦氏は、安政2（1855）年 深浦村（現深浦町）円覚寺に生まれ、5歳のとき、祖父・尊岸に随って剃髪得度をします。その後、父・尊海の下での修験道修行、京都醍醐山で密教研究、報恩院の僧正に就いて恵印法流及び峰中秘訣を受けた後、入峰修行を経て、明治16年に本山との連絡役「触頭（ふれがしら）」に任命、明治21（1888）年には円覚寺住職となります。

柳田が紹介した「海浦が公にした深浦沿革史」とは『陸奥津軽 深浦沿革誌』（明治31年 深浦保勝会；大正7年増補再版発行）のことで、増補版によると**深浦の地は、「初は安東（アト）浦と云ひ。次に海浦と称し。」**とあります。海浦氏は、円覚寺第二十六世住職ですが、『新撰 陸奥国誌』（青森県 明治9年）によれば、円覚寺は貞観（じょうがん）年間（859～877年）に円覚法師によって創建されたもので、海浦氏は自分までで51代と語っていますので、名字にみるとおり、正に深浦の歴史そのものの旧家と言えます。

『修験研究』では、略歴の他、多くの方が海浦氏の修養・努力について書いています。大正10年に亡くなったとき、本山から「篤学院」の号が贈られたことでも、その勤勉実直さを知ることができます。また一方、海浦氏の弟・海浦篤彌氏の「篤学院と余」では、年齢の離れた弟を親のように支え、信じ、導いていく様子が書かれています。

さて、海浦義観氏について調べていくと、「毛髪刺繍観世音三十三体の尊影」「毛髪刺繍八相釈尊涅槃尊影」というものが紹介されています。

“毛髪”で刺繍した観音像、釈迦像ということでしょうか。

『修験研究』の巻頭には「毛髪刺繍大涅槃像」として写真が掲載されています。

残念ながら白黒で不鮮明なため、詳細を知ることができませんが、真言宗 泉谷山 浄光明寺の中興開山・大三輪信哉住職が、海浦と曼荼羅についての文章（初出；海浦の創刊した宗派の雑誌『神變-じんべん』第四號）を寄せています。

「稀世の珍宝は稀世の人を待て現はれ、稀世の人は稀世の時を以て識らる、頭髪刺繍の大涅槃像は誠に稀世の珍宝たり、」と書き始め、「～前号の紙上に明治の大作として紹介し、今又稀世の珍宝として讃嘆を吝（おし）まざるの偶然にあらざるを知れ。」としています。

毛髪については、「～ 信男信女八萬四千人の毛髪を集め一針一真言を以て繡成し ～」と、男女を問わず多くの人たちの毛髪を集め、刺繍したことが書かれています。

稀世の珍宝と書かれていますが、毛髪で刺繍された仏画というのは、他にないのでしょうか。

大三輪氏は、海浦氏が釈迦涅槃像を制作した当時の「発願文」を紹介していて、その中では、頭髪刺繍の起源について下記のとおり触れています。

「～ 頭髪刺繍の聖像は空念法師を祖とす。法師は延宝年間の人、 ～」

延宝年間とは、1673～1681年のことですから、海浦が毛髪刺繍を作った明治30年代から遡ること200有余年、長い時を隔て海浦氏に影響を与えたと思われる法師とその毛髪刺繍とは、どのようなものだったのでしょうか。

空念が縫った毛髪刺繍は、「当麻曼荼羅（たいまーまんだら）」というものです。

当麻とは、奈良にある「当麻寺」のことで、同寺に伝わる「中将姫伝説」のなかで、姫が蓮糸で織ったという曼荼羅に由来しています。【参考；日本大百科全書 15 小学館 平成6年 他】

現存し、空念が縫ったと確認されている「髪繡当麻曼荼羅」は全国に三幅あり、そのうちの一幅は、なんと津軽の地、藤崎町にある「摂取院」に所蔵されています。

『毛髪で縫った曼荼羅 一漂泊僧 空念の物語』（新典社選書 31 日沖敦子著 新典社 平成22年）

『当麻曼荼羅と中将姫』（日沖敦子著 勉誠出版 平成24年）には、他の「髪繡当麻曼荼羅」とともにカラー写真で紹介されていて、人の毛髪で縫われたものとは思えないほど精緻なものです。

空念が曼荼羅を縫った時の様子は、『永禄日記』『平山日記』などの古文書類にも記録があり、『奥富士物語』では、後年開帳された際の記述のなかで、曼荼羅の制作を知った当時の津軽藩主・信政公が、櫛毛三筋を使者に届けさせ、阿弥陀尊の首の部分に使われたと書かれています。

制作されたのは元禄4（1691）年のことですが、同じ津軽の深浦、円覚寺の海浦氏がこの撮取院の「髪繡当麻曼荼羅」と空念の言伝えを見聞きし、影響を受けたことは間違いのないことでしょう。

では、空念とはどんな人物だったのでしょうか。

『奥富士物語』などには「伏見大樹院之僧侶空念坊」と記述があり、現在の京都市伏見区にあった「大樹院」の僧侶であったことは確かですが、その出生などは明らかにされていません。

その足跡の一端を知る手がかりが、撮取院に残されている『撮取院之記』にあります。

延宝2（1674）年から元禄4（1691）年にかけて制作した六十六幅にも及ぶ曼荼羅と、奉納した寺院の名称が記録されていて、南は熊本県の阿弥陀寺から北の撮取院まで、全国を行脚していたことがわかります。

それらの寺院では「髪繡当麻曼荼羅」が現存していない、或いは寺院そのものが無くなっていますが、秋田市の光明寺に残る過去帳に、空念のその後と謎の最後が記されています。

光明寺には元禄3（1690）年に訪れ、髪繡の曼荼羅と涅槃像を納めていますが、その前は江戸に於いて毛縫の仏画を制作していたこと、光明寺から江戸に戻った翌元禄4（1691）年、一生の縫い納めを決意し、縫い上げた曼荼羅を当麻寺へ奉納した後、銭湯の湯上りに倒れ往生しています。

空念の生涯とともに死もまた謎とされているのは、現存する曼荼羅の一つ、仙台市・昌繁寺での制作が、伝えられる没年の翌元禄5（1692）年となっているためです。また元禄3（1690）年から宝永元（1704）年にかけて、福井県の普門院の開祖で、出生も明らかとはされていませんが、「空念」という僧が、納経のために全国を行脚した記録が残っています。毛髪刺繍の空念を引き継ぐかのように全国行脚をしていたというのは、偶然にしても出来すぎではないでしょうか。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介（第15回）

児童閲覧室では、毎月テーマに沿った展示（テーマ展示）をしています。2月の展示テーマは「ひっこし」で、テーマに関連する児童書等を展示しています。また、ブックリストはご自由にお持ち帰りいただけます。

展示ではリスト掲載以外の児童書等も展示しています。どうぞご覧ください。

『ニニのゆめのたび』

アニタ・ローベル／さく まつかわまゆみ／やく 評論社 2012 (Eーベル*ア C02A)
いえのなかが ちらかっているのをみた ニニは、みんな おでかけするのかなとおもいました。そんな いえのなかを あるいていると、おおきなくろいふくろをみつけました。

『おうさまのおひっこし』

牡丹靖佳／作 福音館書店 2012 (Eータン*ヤ A05B)



『モモちゃんとアカネちゃん』

松谷みよ子／作 講談社 1974 (児913Jマツタニ*ミ1(3) A08A)

『段ボールのひみつ』

出口由美子／漫画 学習研究社コミュニケーションビジネス事業室 2008 (児585Jダンホー A03A)



今回の児童閲覧室テーマ展示「ひっこし」のディスプレイは、青森県立青森中央高等学校と、本年3月末に閉校となる青森県立青森戸山高等学校の皆さんが、「ひっこし」をイメージして作成したものです。

高校生の皆さんの児童閲覧室のディスプレイは、当館ホームページ「高校生による、子どもの読書活動アシスト」(<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/koukousei/koukousei-5.html>)でご覧いただけます。



※写真は図書等展示前の様子
上（南側窓）青森中央高等学校
下（エントランス側）青森戸山高等学校

郷土資料 の 紹 介 (第 15 回)

少し前のことになりますが、皆さんは年末の大掃除はできましたでしょうか。「やらなきゃ」と思いながら結局できなかった、という方もいることでしょう。テレビや書店では、部屋の片付けや整理術に関連したものがおおはやり。

最近の当館でも、「こんまりさん」こと、近藤麻理恵さんの『人生がときめく片づけの魔法2』（サンマーク出版/2012）を予約されている方が10人以上おり、依然として利用者の関心の高さを伺わ

せます。

さて、ずっと昔から、これらに通じる快適な暮らし方を指南、実践していた県人を御存じでしょうか。そう、今年生誕140年になる羽仁もと子さんです。彼女は1873年に八戸市に生まれ、教職を経て、日本初の女性記者となった方です。

また、生涯にわたりキリスト教を信仰するとともに、家庭生活の合理化などを唱えた思想家としても有名です。

『婦人之友』の前身である『家庭の友』の創刊に関わり、1920年代後半からは、朱色の布地に動植物をあしらった平福百穂さん（秋田県出身の日本画家）の装丁が印象的な『羽仁もと子著作集 1～17巻』（婦人之友社）が刊行されています（後年、新版1～21巻が刊行されました）。



このうち、旧版第6巻家事家計編（新版第9巻）の巻頭で、この巻を編み終わり、身近に雑然と積み重ねてあったものを整理したときの心地よさを感じた、と記しています。

客間は客間らしく、寝室は寝室らしく、台所は台所らしく、特段何かで飾りたてなくてもモノがあるべきところにさっぱりと置かれることを望む彼女。

また、家の中が片付かない原因について、服を脱ぎっぱなしにしたり、顔を洗って洗面所を水だらけにしたままにするなどの後片付けをしないことを挙げ、何事も後始末が重要であると述べています。

当館には前述の著作集全巻（旧版と新版）や彼女に関する著作があります。

新しい生活が始まる春を待つ間、清々しい心が反映され、今でも色あせることのない彼女の家事や生き方全般に対する考え方に触れてみてはいかがでしょうか。

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様幅広くご利用いただいております。

このコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段はあまり人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

全国文学館協議会共同展示「文学と天災地変」 青森の文人たちの残したもの

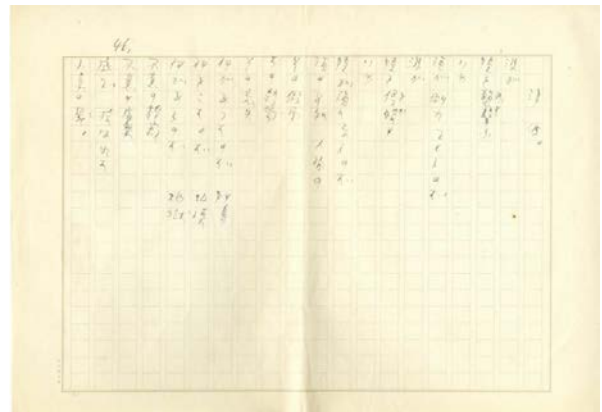
あの日から2年。大きな被害から復興しつつある文学館も、支援活動を行っている館もあります。今、文学館として何かできないか。——このような思いから、全国文学館協議会では、平成25年3月、「文学と天災地変」を共通テーマに、それぞれの持ち味を生かした企画を立て、展示を行うこととなりました。

青森県近代文学館では、「青森の文人たちの残したもの」と題し、地震や津波、飢饉など自然の脅威や過酷な現実を見つめ、青森の文人たちがどう生き、どんな作品を残したか、図書や原稿等で御紹介します。

① 村次郎原稿「津波」

八戸の鮫町の石田屋旅館の長男として生まれた村次郎は、将来を嘱望された詩人でしたが、戦災で被害を受けた旅館の再建を決意し、詩の発表をやめてしまいます。

しかし、大須賀海岸の自然と風土を愛した村次郎は海や風を歌った詩を残しました。



当館が所蔵する未発表詩集「海村」の原稿には、「昭和56年10月25日脱稿」と書かれています。この中に、「津波」と題する詩があります。平成23年3月11日の津波で石田屋旅館は一階天井まで浸水し、その後取り壊されました。

② 秋田雨雀短冊「自然人をころし人人をころす ぬばたまのこの短夜の夢さむる日よ」

大正12年9月1日、秋田雨雀は旅先の秋田県で大震災を知ります。秋田市、黒石、青森を経て、ようやく東京に着いたのは9月6日のことでした。雨雀は、そこで目にしたはずの東京の惨状よりも、流言飛語に踊らされる人々の姿を日記に残しています。

青森に戻っていた雨雀は、10月18日の日記に、黎明社の人々と和歌の会を開き、「虐殺」という題で「テロリズムを何方か先に演ずるのかあまりに早い水鳥のおと」「自然人を殺し人人を殺す ぬばたまのこの短夜の夢醒むる日よ」の2首を記しています。

翌年1月、雨雀は、震災の体験を元に戯曲「骸骨の舞跳」を書き、4月に「演劇新潮」に発表しますが、発売禁止になってしまいました。



